

硬化性萎縮性苔癬

研究分担者	長谷川稔	福井大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学 教授
研究分担者	浅野善英	東京大学医学部附属病院皮膚科 講師
研究分担者	石川 治	群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学 教授
研究分担者	神人正寿	熊本大学大学院生命科学研究部皮膚病態治療再建学 准教授
研究分担者	竹原和彦	金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚科学 教授
研究分担者	藤本 学	筑波大学医学医療系皮膚科 教授
研究分担者	山本俊幸	福島県立医科大学医学部皮膚科 教授
協力者	佐藤伸一	東京大学医学部附属病院皮膚科 教授
研究代表者	尹 浩信	熊本大学大学院生命科学研究部皮膚病態治療再建学 教授

研究要旨

硬化性萎縮性苔癬（硬化性苔癬）は、白色調の萎縮性丘疹が集簇して白色局面を形成し、進行すると癬痕形成に至る原因不明の稀な慢性炎症性皮膚疾患である。女性の外陰部から肛門に好発するが、小児、男性にも生じ、他の部位にもみられることがある。本症の診断や治療に関するガイドラインは世界的にも明らかなものがなく、我々は診療ガイドラインを作成することとした。本年度は、まず clinical question (CQ)を確定することとし、研究代表者や研究分担者が実際に集まって会議をしたり、メール会議を行い、最終的に7つのCQが確定した。

A. 研究目的

硬化性萎縮性苔癬（硬化性苔癬）は、白色調の萎縮性丘疹が集簇して白色局面を形成する原因不明の稀な慢性炎症性皮膚疾患で、進行してしばしば癬痕形成に至る。閉経後の女性の外陰部から肛門にかけて好発するが、小児や男性、そして他部位の皮膚や粘膜にも生じうる。また、痒みやひりひりした痛みを感じる人が多い。診断上は、限局性強皮症などと鑑別が問題になる場合もある。治療としては、副腎皮質ステロイドの外用がよく行われているが、その診断や治療に関しては、世界的にもガイドラインが見当たらない。そこ

で今回我々は、本症の診断や治療に関するガイドラインを作成することとした。

B. 研究方法

ガイドライン作成にあたり、本年度はまず clinical question (CQ)を決めることとした。強皮症・皮膚線維化疾患の診断基準・重症度分類・診療ガイドライン作成事業研究班（限局性強皮症・好酸球性筋膜炎・硬化性萎縮性苔癬）の研究代表者や研究分担者がCQの候補を挙げ、実際に集まって会議をしたり、メール会議を行って、重要と考えられるCQを選択することとした。

C. 研究結果

研究班の中でまず、13のCQの候補が提案されたが、会議の中で十分に検討した結果、以下の7つのCQをガイドラインにとりあげることとなった。

[CQ1] 診断に有用な臨床所見は何か？

[CQ2] 必要な検査は何か？

[CQ3] 自然寛解することはあるか？

[CQ4] 副腎皮質ステロイドの外用は有用か？

[CQ5] タクロリムス軟膏の外用は有用か？

[CQ6] 紫外線療法は有用か？

[CQ7] 外科的切除は有用か？

D. 考案

最初は、“好発部位はどこか？”“限局性強皮症との鑑別に役立つ所見は何か？”などのCQが提案されていたが、これらをまとめて[CQ1]の“診断に有用な臨床所見は何か？”とし、他の疾患との鑑別で重要な臨床のポイントを記載していくこととなった。

また、“免疫異常を伴うか？”“生検は必要か？”などのCQも提案されたが、これらをひとまとめにして、[CQ2]の“必要な検査は何か？”とすることに決定した。

成人では慢性に経過して難治性であることが多いが、小児例では自然消退する場合もあり、どの程度の頻度で自然軽快がみられるのかを示すために、[CQ3]“自然寛解することはあるか？”を採用することとなった。

治療については、第1選択と考えられる副腎皮質ステロイドの外用に関して、“[CQ4]副腎皮質ステロイドの外用は有用か？”とい

うCQを設けた。”副腎皮質ステロイドの内服は有用か？”“副腎皮質ステロイドの局注は有用か？”というCQも提案されたが、これらの治療が行われる頻度は低いと考えられるため、独立したCQにはせず、[CQ4]の中でコメントすることとなった。

外用治療の第2選択と考えられるタクロリムス軟膏の外用に関しては、[CQ5]として“タクロリムス軟膏の外用は有用か？”というCQを設定した。

紫外線療法が行われることも少なくないため、[CQ6]の“紫外線療法は有用か？”を採用した。

最後に、[CQ7]として“外科的切除は有用か？”というCQを作成し、本疾患による陰門狭窄、尿道狭窄への治療についても解説することとなった。

来年度以降は、各CQに関して文献的な考察を行い、エビデンスレベルを明らかにし、推奨度を決めていく予定である。

E. 結論

硬化性萎縮性苔癬のガイドライン作成にあたり、今年度はまずCQを確定することに専念し、7つのCQが決定した。

F. 文献

- 1.Powell JJ, Wojnarowska F. Lichen sclerosus. *Lancet*. 1999; 353: 1777-1783.
2. Cooper SM, Gao XH, Powell JJ, Wojnarowska F. Does treatment of vulvar lichen sclerosus influence its prognosis? *Arch Dermatol*. 2004;140:702-706.

3. Zendell K, Edwards L. Lichen sclerosus with vaginal involvement-report of 2 cases and review of the literature. JAMA Dermatol. 2013;149:1199-1202.

G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし